

中国冒險譚

小説マルコ・ポーロ

中国冒險譚

小説

マルコ・ポーロ

陳舜臣



小説 マルコ・ポーロ

昭和五十四年二月二十五日 第一刷
昭和五十四年七月二十五日 第五刷

定価 九八〇円

著者 陳 舜 臣

発行者 檜 原 雅 春

発行人 株式会社 文 藝 春 秋
〒一〇二 東京都千代田区紀尾井町三

印刷 凸版印刷
製本 中島製本

万一落丁乱丁の場合はお取替えいたします

目次

冬青の花咲く時

五

移情の曲遅し

三一

電光影裡春風を斬る

五四

燃えよ泉州路

七七

南の天に雲を見ず

一〇四

蘆溝橋曉雲園

一三〇

白い祝宴

一五五

明童真君の壺

一七九

男子、千年の志

二〇三

獅子は吼えず

二三七

装幀
原田維夫

小説
マルコ・ポーロ

——中国冒險譚——

冬青の花咲く時 とうせい はなさき とき

まえがき

一二七一年、蒙古の世祖フビライは、国号を『元』と改めた。

おなじ年、遙かヨーロッパは水の都ベニスのまちをあとにして、東へむかった三人の男がいた。マッフェオ・ポーロ、その弟のニコロ・ポーロ、そしてニコロの息子マルコ・ポーロである。男というがマルコは十七歳にすぎなかった。

マッフェオとニコロは二度目の東方旅行である。十八年まえ、この兄弟は宝石の取引のため、コンスタンチノープルへ旅行した。ニコロの妻はそのとき懐妊していた。お腹

のなかにいたのがマルコなのだ。二人は数年後に帰るつもりだったが、治安がみだれたり、戦争がおこったりして、しばらく帰れそうもないので、中央アジアのボハラへ商売に出かけ、そこでフビライの使節に会った。この蒙古の使節は、

——大汗（フビライ）はまだラテン人をごらんになったことがない。この二人を連れて行けばよろこんでいただける。

と考えて、二人に同行をすすめた。フビライはたいへん好奇心のもち主であったのだ。この誘いにたいしてポーロ兄弟は、

—— 誰も行つたことのない土地へ行けば、珍しい財宝が手に入り、それをベニスに持って帰れば大儲けができそうだと。

という商人的発想で同行を承諾した。大汗の使節と同行すれば、道中、絶対に安全であるのはいうまでもない。

ポーロ兄弟は期待したとおり、北京でフビライの歓待を受けた。好奇心のかたまりのようなフビライは、兄弟にキリスト教のことやローマ法王のことなどをこまごまと質問した。帰るときには莫大なプレゼントが与えられ、これは

たしかに商売としては大成功だったのである。だが、十五年ぶりの帰国は、弟のニコロにとっては悲喜相半ばした。妻はすでに死んでいて、彼女の生んだ男の子マルコは十五歳になっていた。

ボーロ兄弟は東方旅行の味が忘れられなかった。ぼろ儲けも魅力だが、フビライとの約束もあった。北京を發つとき、

——折返しキリスト教徒で各種の学芸に通曉した学者百人を連れて参れ。それからエルサレムのキリストの墓のランプから聖油をもらって来るように。

と、フビライに言われ、ローマ法王への親書も托されたのである。だが、兄弟はすぐには東方へ再出發でできなかった。ローマ法王が死に、ゴタゴタがあつて容易に後継者が決定しなかったからなのだ。相手がいないので、親書は宙に浮いた形である。二年待つて、しびれを切らしたボーロ兄弟は、新法王決定を待たずにベニスを發つた。それが前述したように一二七一年のことで、十七歳のマルコを伴うことにしたのである。

途中のこまかいことは省略しよう。エルサレムで聖油をもらったが、学者百人はあきらめ、シルクロードの南道の

コースをとつて東進したのである。カシユガル、ホータン、樓蘭、敦煌を経て、寧夏から黄河に沿つて行く。ベニスを出てから四年近くもかかつて、一二七五年、やつとフビライのいる上都にたどりついた。

当時、元は北京を「大都」と称し、内蒙古に「上都」という都城を造営していた。蒙古族はやはり草原に郷愁をもつうえに、長年の遊牧生活のせいか、おなじところにじつとしてゐるのに堪えられなかったらしい。夏の避暑地として、上都をつくつたのだ。

ともあれ、マルコ・ボーロは十七歳から二十をすこしこえる人格の形成期を旅にすごした。これはどんな大学にもまさる教育を受けたことになる。彼ほど見聞がひろく、そして深い青年は、当時の世界にはいなかったはずだ。彼は語学の天才であつたとみえて、旅行中にベルシャ語（これは当時のモンゴル帝国の共通の教養語であつた）、トルコ語、モンゴル語を完全にマスターした。語学だけではなく、各民族の風俗、習慣、生活様式、人情の機微にまで通じていたのである。しかも彼は整つた容貌のもち主であつたという。フビライが、この利発な美青年に目をつけたのはとうぜんであらう。

——わしの側近に仕えよ。

と、フビライは命じた。

元王朝は世界帝国であり、外国人が官吏になることなど、まったく意に介していない。人口からみても蒙古族は少数なので、同族だけで世界帝国を運営することは不可能といわねばならない。このころ、絶大な権勢をふるったアフマドという人物は、回人すなわちウイグル族であった。イラン族、ウイグル族、そのほかのトルコ系諸族は「色目人」と呼ばれて、政府の要職についていたのである。

そんなわけで、マルコ・ポーロが元王朝に仕え、重用されたのはけっして例外的なことではなかった。フビライはすぐにマルコに雲南への出張を命じた。おそらくテストのつもりであろう。六カ月もかかる奥地への困難な出張である。だが、彼はみごとに使命をはたした。

これまで各地に派遣された役人が、使命をはたして帰るだけでは、フビライは満足しなかった。その地方の事情について、ことこまかに報告しなければならぬ。それが疎略であったり、面白くなかったりすると、フビライは激怒して、

——ここな大間拔けの能なし豚め！

と、口汚く罵ったのである。

このことでは、マルコ・ポーロは合格点以上をとった。いや、満点といってよかったかもしれない。彼の観察はするどく、そして正確であった。また超人的な記憶力をもっていた。彼は語学の天才であったが、あらゆる語彙を駆使し、おもしろおかしく物語ることにかけても天才であった。それは後年、彼の口述を筆記した『東方見聞録』の語り口からも察しられる。こうしてマルコ・ポーロは世祖フビライの寵臣もてんとなった。

『東方見聞録』につぎのようなくだりがある。

……読者諸君よ、まことにマルコ氏は大汗のもとにたつぷり十七年間もとどまり、そのあいだじゅう使節の仕事をやめたことがなかった。それというのも、大汗はマルコ氏があらゆる土地から、おびただしい情報をもたらし、しかもじつにみごとに使命をはたして帰るので、すべての重要な使節や、遠隔地への使節には、かならず彼を起用したからだ。……

ここで注意すべきことがある。右のように述べながら、

どのような重要な用件で、いつ、どこへ行き、どんなふう
にみごとに使命をはたしたか、そのいきさつについてマル
コ・ポーロはいっさい口を噤^{ひそ}んでいることだ。

どこへ行行ったかについては、『東方見聞録』のなかに登
場する地方であろうから、いくらか察しがつくが、時代や
用件や経過などはさっぱりわからない。

フビライの寵臣となり、重要な場面に起用されたという
のに、マルコ・ポーロの名はあの浩瀚な『元史』や『新元
史』のどこにも登場しない。マルコが法螺^{ばら}を吹いたとは思
えない。さっぱりわからないと述べたが、じつはマルコの
帰国の際の最後の役目だけはわかっている。イル汗国の
あるじアルグン汗の妃となるべきコカチン姫を、海路、イ
ランへ送り届けることであった。これは超大役であり、ま
ぎれもなく大臣クラスの仕事なのだ。大蒙古帝国の東のあ
るじが、皇族の娘を、西のあるじへ正妻として送り届ける
のである。アルグン汗はフビライの弟の孫にあたる。この
ような事実から、マルコが元王朝で重要な人物であったこ
とは信じないわけにはいかない。――

そこで、わたくし推理するに、マルコ・ポーロがフビラ
イのもとではたした役目は、わかりやすくいえば隠密的な

ものではなかっただろうか。徳川幕府でいえば公儀隠密、
「お庭番」である。これ以上に重要な役目はすくないのだ
が、正史の記述からは、その仕事もたずさわった人物の名
も消し去られる。いや、はじめから記録されない性質のも
のであろう。ベニスに帰ってからでも、マルコ・ポーロは
そう軽々しく語るわけにはいかなかったのである。

マルコ・ポーロのこの種の「仕事」については、おそら
くこれからも新史料は出ないであろう。永遠に謎につつま
れてしまう。歴史学者は根拠のないことを推測によって論
じることができないが、小説家はありがたいことに、あれ
これと推理し、想像することが許されている。これは「小
説」なのだ。

――マルコ・ポーロよ、あなたはいったい、いつ、どん
な用で、どこへ行ったのですか？

と問いかける気持で筆をおこした。

1

なんともいやな仕事だなあ。ああ、いやだ、いやだ。

……

マルコ・ポーロはため息をついた。いくらいやだといつても、その仕事を辞退することはゆるされない。大汗フビライは絶対的な独裁者である。マルコはいましがた宮廷から戻ったばかりであった。夏ではないので、元の朝廷は現在、大都といわれる北京にあったのだ。そこでマルコは、

——巴念速とともに浙江へ赴くべし。

という密勅を受けたのである。彼のうける命令は公式のものではない。たいていが極秘のものだった。マルコがフビライに仕えてすでに三年になる。最初に雲南へ使者に立って以来、いろんなことをしたが、密勅による仕事だから、だいたい不愉快なものもあった。それでも今回ののはひどすぎる。それに仕事の相棒がおもしろくない。

巴念速はフビライ側近のラマ僧楊璉真加の弟子である。

マルコはおなじ寵臣としてこの楊璉真加とは、毎日のように顔をあわせ、そのたびに生理的な嫌悪感をおぼえた。巴念速もおなじラマ僧で、師匠の腰巾着的存在であった。

楊璉真加も高弟の巴念速を自分の後継者にしようとして、大汗の朝廷に売り込もうとしているらしい。なにやかやと口実をつけては、巴念速を宮廷に連れてきた。だからマルコはなんども会っている。彼は師匠もきらいだが、弟子の

巴念速のほうが、もつときらいであった。それなのに、なんの因果か、一しょに仕事をしなければならない。マルコは家に帰って、父親のニコロにこぼした。

——ここはキリスト教の世界ではないのだ。いま大皇帝のご機嫌を損じてみる。せつかくの、これまでの苦心も水の泡だ。辛抱するんだ、辛抱を。

と、父は言った。

父や伯父はフビライの恩寵を頼りに、できるだけ金を貯めこみ、帰国にあたっては、さらに莫大な下賜品をもらうつもりでいた。それはすべてフビライの胸三寸できまる。ご機嫌を損ねることが一ばんおそろしい。

(おやじはこんどの仕事がどんなものか知らんからなあ。

……)

マルコはおとなしく頭を掻いてひきさがった。仕事の性質上、彼はこれまでそれを父や伯父に言わないことにしていた。父たちもうすうす、特別な仕事らしいと察しているようで、強いてきこうともしなかった。しかし、こんどの仕事だけは、父たちも想像がつかないであろう。——

「誰ともうまくやるんだぞ」

父はマルコが相棒に不満があるだけだと思っているらし

い。マルコにとって相棒の巴念速も不快だが、仕事そのものも不快の域をはるかに越えていたのである。

「わかっていますよ」

マルコはそう答えるほかなかった。

「役に立つ人間なら大事にされる。ここではそんなことになっておるのだ」

そばから伯父も口を挿^さんだ。

「そうだ。宋の宰相文天祥にたいしても、ぜったいに殺してはならぬという勅命が出ているという。文天祥は気骨があり、文章にすぐれ、役に立つ男じゃから」

父は論すように言った。

「よくわかっていますよ」

と、マルコはくり返した。

南宋の首都杭州が陥落し、幼帝が母親や宮女たちとともに北京へ護送されたのは、二年まえの至元十三年（一二七六）のことであった。首都陥落直前、文天祥は包圍の蒙古軍司令部に赴き、蒙古の將軍伯顔^{ハクワン}たちに「古今の禍福」を説いた。蒙古の將軍たちは、文天祥の説くことばに感動したという。

（これはたいへんな人材である）

というので、蒙古軍は彼を抑留してしまった。だが、文天祥は北京へ護送される途中、脱走して南へ走った。幼帝は蒙古に降^{くだ}って北京へ送られたが、皇室ゆかりの人が福州で、亡命政權を立てている。文天祥はその後、江西あるいは南方でゲリラ活動をしたが、現在は広東の惠州から、海浜に近い海豊県に出て、元軍と戦っているということだった。フビライは広東への遠征軍にたいして、

——文天祥を殺してはならぬ。

と、嚴命を出していたのである。

蒙古政權は基本的には、草原で食うか食われるかの闘争をくり返した軍事集団であった。勝つためにはどんなことでもする。きれいごとをならべたりしない。人間についても、修飾^{しゆし}過剰^{かじり}を好まない。役に立つか、立たないか。——人物評価の基準は、無味乾燥^{むみくさう}といってよいほどはつきりしている。

文天祥はその人格と文章力が役に立つと評価されて、いまは敵の総帥であるのに、フビライによって殺害を禁じられているのだ。三人のボーロも、役に立つラテン人ということでは優遇されている。これからますます有能であることを、事実によって示さねばならない。

「若いのだ。どんな苦しいことでも人生の経験になる。与えられた仕事に背をむけてはならぬぞ」

ニコロ・ポーロは、いかにも父親らしい訓戒を垂れた。だが、さすがにこれは形式的すぎたと思ったのか、話題を変えて、

「楊璉真加が江南釈教総統に任命されるという噂があるが、それはまことかな？」

と、訊いた。

ちかごろラマ僧がいばっている。フビライが彼らを信任しているからだ。ポーロ一族は、たいして信心深くはないのだが、それでも一応キリスト教徒なので、ラマ僧の跋扈はおもしろくない。マルコと一しょに仕事をする事になった巴念速の師匠の楊璉真加が、江南の釈教（仏教）最高のポストにつくという噂があった。

「ほんとです。巴念速は私とやる仕事のほかに、師匠の新しい縄張の下検分の役目も帯びているようです。……下検分だけならいいのですが、やつらのことだから……」

マルコはそこで口を噤んだ。

当時のラマ僧は貪婪であつた。賄賂をうけ、財宝をむさぼるうえに、好色な者が多かったのである。

「金と女か。……」

ニコロは吐きずてるように言つた。巴念速は師匠よりひとあし先に南下し、師匠のために財宝と美女をあつめるのであろう。ニコロはそう想像した。

「それだけならいいのですがね」

と、マルコは小さな声で言つた。

「ま、とにかく辛抱じゃ、辛抱じゃ」

ニコロは念を押した。

2

それから一と月たつて、マルコ・ポーロは浙江にいた。浙江で最大の都市は、いうまでもなく美しい西湖のほとりにある杭州である。南宋の首都であつたころは、臨安府と称された。二年まえ、この大都市は蒙古軍に包囲されたが、南宋は降伏し、蒙古軍は無血入城したので、戦火による被害はなかった。

マルコ・ポーロの見聞録では、このまちの名を、

——QUNSAI（キンサイ）

としている。

南宋は追われてこの地に來たが、あくまで北方の失地を回復し、開封の都に凱旋するのが国家至上の目的であつた。だから首都といつても、杭州は臨時的なものにすぎないという考えから、「行在」と呼ぶことにした。日本でも笠置に逃れた後醍醐天皇がそこを「行在」と称した。後醍醐天皇の即位は、南宋滅亡の四十二年後にすぎない。日本では唐音に従つて「アンザイ」と読んでいるが、中国江南の音では「キンサイ」であつた。

マルコ・ポーロは、のちになんともこの杭州を訪れたが、このときは五日間滞在しただけで、錢塘江を渡つて東南へむかつた。めざすは紹興である。

紹興といえば酒が連想される。「老酒」^{ラオチウ}という名で日本人にも親しまれている。また近代中国文学に関心のある人は、魯迅の誕生の地ということを知ることがあるであろう。

南宋のときは紹興府と呼ばれたが、元は紹興路と改めた。紹興路総管府の長官は正三品の位階をもつが、派遣されてきた二人が、大汗の寵臣であり、信任厚いラマ僧の高弟であることを知っているの、下にもおかぬもてなしをした。マルコ・ポーロが案内された宿舎は、紹興のまちでも最も宏壯な邸宅であつた。

「やれ、やれ……」

マルコは両手を上にあげ、大きなあくびをした。案ずるよりも生むは易しというが、たしかにそうであつた。巴念速という、いやなやつと一しよの旅であつたが、顔をつき合わずにすんだ。ラマ僧である巴念速は、かならず寺院に泊つた。大都北京を出てから、おなじ宿舎に泊つたことはない。やれ、やれ、である。だが、これからは仕事にかかるのだから、いままでのようにうまくは行かないだろう——その意味でも、緩みかけた心をひきしめなければならぬ。

紹興の宿舎の床には、大理石が敷きつめてあつた。マルコは靴をぬいで、素足で部屋の中を歩いてみた。足のうらがひんやりしていい気持である。中国の士大夫階級のあいだでは、素足になるのは無作法とされていたが、誰が見ているわけでもない。マルコがそんな解放感を味わっていると、部屋の扉が音もなくひらいた。

「あ、これは……」

マルコは思わず自分の足もとを見た。

はいってきたのは、士大夫よりも遠慮しなければならぬ相手——女性だったのである。

足もとから目をあげて、マルコはあらためて驚いた。

——その女性の美しいこと。白磁を思わせる、潤いのあるなめらかな膚。それに漆黒の髪と瞳。

(ああ、よかった。……)

マルコはこのごろ、美しい女性に会うと、いつもそう思う。これにはわけがある。昨年のことであったが、大汗フビライはマルコにむかってこう訊いた。

——妻をめとる気持はあるか？

これは質問ではない。大汗のことばは、質問の形式をとっていても、じつは命令なのだ。

——はい、ございます。

マルコはそう答えるほかなかった。

——じつは南から宋の宮女がおおぜいやって来た。そのうちの最も美しい女を、おまえに妻として与えよう。

と、フビライは言った。

——ありがとうございます。

と、マルコは跪いて礼を述べた。だが、翌日、大汗は彼を召して、

——じつは宋の宮女たちのなかに、抜群といえるほどの女はいなかった。どうじゃな、並の女で我慢いたすか、そ

れともこのたびは見送るか。さ、どちらかをえらべ。

このような問い方は命令ではない。

——このたびは、見送ることにいたしとうございます。

と、マルコは答えた。

このようないきさつがあったので、彼は美女を見ると、はやまったことをせずによかった、と思うのである。

マルコは目をしばたいて、そこに立っている美女にむかって訊いた。

「なにかご用ですか？」

「兄がお会いしたいと申しております」

と、美女は答えた。

「あなたの兄上ですか？」

「はい、さようでございます」

「兄上はどのようなお方かな？ いや、それより、あなたは？」

「私もは、もとこの邸に住んでいた者でございます。

……申し遅れましたが、わたくしは少宝と呼ばれております」

「少宝のですか。……で、この私になにか？」

「お願いがございます」

美女はその場に跪いた。

この邸のもののあるじの家族といえ、紹興でも屈指の名族であったにちがいない。たしかに女のことばや所作には気品があった。跪いた女のすがたを、マルコはこよなく可憐だと思った。

「どのような願いでもきいてあげたい。しかし、私にできることと、できないことがあります。できることであれば……」

と、マルコは言った。

「あなた方、北の使者は、おおぜいの人夫をあつめていらつしやいますね」

「ああ。……」

マルコは唾をのみこんだ。土木工事のためという触れこみで、数百人の人夫を募集しているのは事実であった。

「杭州からこの地方へ、軍隊が移動しております。ただの工事ではありません。……そして、兄はあるところからおだやかならぬ話をきいて参りました」

「おだやかならぬ話とは？」

「工事は雲門山でおこなわれるとか。……」

少宝は跪いて、顔を伏せたままだった。彼女の表情は、

マルコには見えない。雲門山という地名をきいたとき、マルコの顔色は変わった。これも少宝には見えなかったはずである。だが、マルコは自分の狼狽ぶりを、彼女に気づかれたと思った。

「工事をやめよ、とおっしゃるのですか？」

と、マルコは訊いた。

「いいえ、そんなことをお願いしても、ききとどけられるはずはないでしょう。わたくしたちは、無理なお願いを申し上げているのではございません。……あなたさまにできることだと思っております」

「そうですか。……では、おっしゃってください。さ、いつまでも跪いていないで、立ってください。そこに椅子があります。腰をおろして、ゆっくりと話してください」

マルコは手をのぼし、そっと少宝の腕をとった。彼の指がふれると、少宝のからだはしずかに浮きあがってきた。かぐわしいかおりが漂ってくる。それは蘭の花のにおいに似ていた。

マルコはふるさとのベニスにいたころ、紳士がやさしく淑女の腕をとって、席をすすめるシーンをなんとも見たことがある。当時、彼はまだ少年だったので、自分でそれを